

資 料

臨床看護師が業務遂行の中で抱える問題意識と課題

—大学院入学ニーズ調査の結果から—

Awareness of the problems faced by nurses working in hospitals and subject they want to solve
An analysis of the questionnaire survey about nurses' need for studying at graduate school

安藤 晴美¹⁾, 松下 年子¹⁾, 岡部 恵子¹⁾, 天野 雅美¹⁾,
内野 聖子¹⁾, 吉岡 幸子¹⁾, 大野 明美²⁾

Harumi Ando, Toshiko Matsushita, Keiko Okabe, Masami Amano,
Seiko Uchino, Sachiko Yoshioka, Akemi Ohno

キーワード：臨床看護師，大学院，ニーズ

Key words : nurses, graduate school, needs

要 旨

本稿は、本学が実施した大学病院の就業看護師の大学院入学ニーズ調査（2008）の結果の中から、「臨床看護師が業務遂行の中で抱えている問題意識と、研究等で解決したい／学びたい課題（以降、解決したい課題）」に焦点をあてたものである。研究対象は、大学院へ入学すると仮定した場合の解決したい課題の設問に「あり」と回答した168名であり、このうち107名（63.7%）に解決したい課題の内容が記載されていた。自由記載からは、計163個の有意義な内容が抽出され、その中の「解決したい課題」と判断できた157個の内容に焦点をあて、それらを類似性に基づきカテゴリー化した。その結果、それらは大きく5つの大カテゴリー【臨床の看護学領域ごとの課題】、【看護の専門性に関すること】、【看護管理に関すること】、【看護の教育に関すること】、【その他】に分類され、対象看護師は臨床看護のみならず、看護組織そのものに関する課題や看護の専門性や研究等をめぐる多様な課題を抱えていることが示唆された。

I. はじめに

医療の高度化と専門分化が進む臨床現場において今、看護職者には、熟練した看護技術と幅広い知識に裏づけされた看護実践と、質の高いケアが希求されている。一方、大学病院には地域の中核的医療機関としての役割、また高度医療機関としての役割、さらに、診療や臨床活動、教育や研究活動を通じて専門性の高い医療人を養成

する役割が求められている。したがって大学病院に就業する看護職者の、継続教育や生涯教育に関する意向やニーズの有無は、大学病院が提供する医療の質や、大学病院の役割遂行に関する評価結果にも連動してくる。

看護職者の生涯教育に関することとしては、平成12年の学校教育法の改正により、大学卒業者のみならず「大卒者と同等以上の学力があると認められた者」にも大学院入学資格が認められるようになり、専門学校や短大卒の看

受付日：2008年12月5日 受理日：2009年2月19日

1) 埼玉医科大学保健医療学部看護学科

2) 元埼玉医科大学保健医療学部看護学科

護職者が直接大学院に入学できる道が開かれた。また、看護の高等教育化を背景に、全国の看護系大学院修士課程の数は平成19年8月現在、102課程に昇り、今後もその数は増加することが予想されている。このような背景にあって2007年、われわれは、大学病院の就業看護師にどのくらいの大学院入学ニーズ、また研究ニーズがあるのかを把握する目的で、質問紙調査を実施した。

今回、上記大学院入学ニーズ調査(2008)の結果の中から、臨床看護師(以降、看護師)が業務遂行の中で抱えている問題意識と研究等で解決したい/学びたい課題(以降、解決したい課題)に焦点をあて、それらを内容分析した。本稿ではその分析結果を報告する。

II. 文献検討

先行研究より、臨床看護師の解決したい課題を知るために「看護」「研究」「課題」「テーマ」などを検索語句としてCiNii、医学中央雑誌によるインターネット検索を行った。その結果、研究論文、解説、総説、会議録など合わせて68件の文献がヒットした。それらのテーマは、「各看護領域の看護研究の動向」「特定領域内の看護研究で取り上げられたテーマ」や「看護研究の進め方」などが目に付くが、臨床看護師が抱えている解決したい課題や、取り組みたいテーマとしてまとめられたものは見つけることができなかった。このことより、臨床看護師が取り組もうと考えている看護研究のテーマに関しての資料は少ないことが予測できる。そのため、本稿は大学院設置に向けた一資料になり得ると考える。

III. 研究方法

1. 調査対象

A 大学関連病院に就業する全看護師を対象として、大学院への入学ニーズおよび、研究ニーズに関する自記式質問紙調査を行った。分析の対象は、大学院へ入学するとした場合に「解決したい課題」について「あり」と回答した168名である。

2. 調査期間

2007年7月

3. 質問紙の設問内容

質問紙の設問は、①基本属性(性別、年齢、臨床経験年数、同居者の有無、配偶者の有無、乳幼児ないし就学中の子どもの有無、資格、職位、最終学歴)、②大学院を設置することの意義、③大学院ができた場合の入学意思、④大学院で学ぶ際に希望する看護学領域、⑤大学院へ入学するとした場合の就業継続の希望、⑥大学院へ入学するとした場合のCNS取得の希望、⑦大学院へ入学するとした場合の不安の有無等、⑧解決したい課題の有

無とその内容等の計16項目である。解決したい課題の内容は自由記載で、それ以外はすべて選択式で回答を求めた。

4. 分析方法

大学院入学ニーズ調査(2008)の全対象者のデータの中から、「解決したい課題」の有無の問いに対して「あり」と回答した者(168名)のデータを抜粋した。抜粋データのうち基本属性および、各設問項目に対する回答は、統計ソフトSPSS 11.5Jを用いて記述統計を求めた。また、「解決したい課題」の内容(自由記載)については、一つひとつの記載について複数の研究者間で検討を重ね、内容の類似性に基づいて分類する内容分析を行った。分析の手順は、一つひとつの自由記載から意味単位ごとにまとめて記述し、その中で「解決したい課題」と判断できた自由記載の記述を内容の類似性に基づき比較しカテゴリー化した。まず、自由記載の共通の意味内容を持つものを集め、そのまとまりを小カテゴリーとした。小カテゴリーの共通の意味内容を持つものはそれを集め、そのまとまりを中カテゴリーとした。小カテゴリーまたは中カテゴリーの共通の意味内容を持つものを集め、そのまとまりを大カテゴリーとした。

5. 倫理的配慮

調査の手続きとしてまず、看護部総責任者(看護部長)と各施設の責任者(総看護師長)に調査趣旨と方法、倫理的配慮等について文書と口頭で説明した。両者から調査実施の承諾を得た後、各施設管理者に質問紙とそれと同数の封筒を手渡し、看護職者への配布を依頼した。なおその際には、質問紙が無記名であること、質問紙記入が本人の自由意思によるものであること等について文面で伝えた。回答済みの質問紙は1部ずつ封筒に厳封され、施設毎に留置きされた後に回収された。回収をもって調査協力の同意が得られたものと判断した。

IV. 結果

1. 回収結果および研究対象

質問紙の配布数は合計2590部、そのうち回収数が2320部(回収率:89.6%)、有効回答数は2304部(有効回答率:89.0%)であった。この中から「解決したい課題」の有無の問いに「あり」と回答した者、168名(6.8%)の結果を、以下に述べる。

2. 看護師の基本属性(表1)

性別は男性が19名(11.3%)、女性が149名(88.7%)であった。年齢は30歳未満が71名(42.3%)と最も多く、次が30歳以上40歳未満で48名(28.6%)であった。平均年齢(n=165)は33.7(±9.3)歳であった。臨床経験年数は10年以上が73名(43.5%)と最も多く、次いで5年以上10年未満の43名(25.6%)、平均経

表1. 基本属性 n=168

| 項目 | カテゴリー | 人 | (%) |
|------------------|-------------|-----|--------|
| 性別 | 男性 | 19 | (11.3) |
| | 女性 | 149 | (88.7) |
| 年齢 | 30歳未満 | 71 | (42.3) |
| | 30歳以上40歳未満 | 48 | (28.6) |
| | 40歳以上50歳未満 | 31 | (18.5) |
| | 50歳以上 | 15 | (8.9) |
| | 無記入 | 3 | (1.8) |
| 経験年数 | 1年未満 | 4 | (2.4) |
| | 1年以上3年未満 | 22 | (13.1) |
| | 3年以上5年未満 | 24 | (14.3) |
| | 5年以上10年未満 | 43 | (25.6) |
| | 10年以上 | 73 | (43.5) |
| 家族構成 (複数回答あり) | 無記入 | 2 | (1.2) |
| | 単身者 | 88 | (52.4) |
| | 配偶者あり | 57 | (33.9) |
| | 子どもあり | 34 | (20.2) |
| 資格 (複数回答あり) | その他 | 21 | (12.5) |
| | 無記入 | 3 | (1.9) |
| | 保健師 | 12 | (7.1) |
| | 助産師 | 9 | (5.4) |
| 職位 | 看護師 | 160 | (95.2) |
| | 准看護師 | 19 | (11.3) |
| | 看護部長・総師長・師長 | 15 | (8.9) |
| | 主任・副主任 | 10 | (6.0) |
| 最終学歴 | スタッフ | 116 | (69.0) |
| | 無記入 | 27 | (16.1) |
| | 看護専門学校 | 103 | (61.3) |
| | 看護系短期大学 | 41 | (24.4) |
| | 看護系大学 | 9 | (5.4) |
| | 一般大学 | 11 | (6.5) |
| | 大学院 | 3 | (1.8) |
| | 無記入 | 1 | (0.6) |

験年数 (n=166) は 10.8 (± 8.6) 年であった。家族構成は単身者が 88 名 (52.4%) と半数以上を占め、配偶者がいる者は 57 名 (33.9%)、子どもがいる者は 34 名 (20.2%) であった。資格は、看護師が 160 名 (95.2%) と最も多く、次いで准看護師の 19 名 (11.3%)、その後を保健師 12 名 (7.1%)、助産師 9 名 (5.4%) が続いた。職位はスタッフが 116 名 (69.0%) と最も多く、次いで看護部長・総師長・師長が 15 名 (8.9%)、主任・副主任が 10 名 (6.0%) であった。最後に、最終学歴は看護専門学校が 103 名 (61.3%) で半数以上を占め、次いで看護系短期大学の 41 名 (24.4%) であった。看護系大学は 9 名 (5.4%)、一般大学は 11 名 (6.5%)、大学院は 3 名 (1.8%) であった。

3. 大学院への入学ニーズ

大学院を設置することに対して「意義がある」は 123 名 (73.2%) と最も多く、次は「わからない」の 22 名 (13.1%) で、「意義がない」と回答した者は 0 名であった (表 2)。また、大学院への入学の意思は、「いずれ入学したい」が 59 名 (35.1%) と最も多く、次は「考えていない」の 53 名 (31.5%) で、「すぐに入学したい」は 23 名 (13.7%) であった (表 3)。CNS 取得の希望は、「希望する」が 108 名 (64.3%) と最も多く、次いで「できたら希望する」の 31 名 (18.5%) であった (表 4)。

4. 解決課題の有無と内容

大学院へ入学すると仮定した場合の「解決したい課

表2. 大学院設置の意義 n=168

| 項目 | カテゴリー | 人 | (%) |
|----|----------|-----|--------|
| 意義 | あり | 123 | (73.2) |
| | なし | 0 | (0.0) |
| | わからない | 22 | (13.1) |
| | 考えたことがない | 18 | (10.7) |
| | 関心がない | 4 | (2.4) |
| | 無記入 | 1 | (0.6) |

表3. 大学院への入学意思 n=168

| 項目 | カテゴリー | 人 | (%) |
|------|----------|----|--------|
| 入学意思 | すぐに入学したい | 23 | (13.7) |
| | いずれ入学したい | 59 | (35.1) |
| | 入学はしない | 29 | (17.3) |
| | 考えていない | 53 | (31.5) |
| | 無記入 | 4 | 20.6 |

表4. CNS取得の希望 n=168

| 項目 | カテゴリー | 人 | (%) |
|----|----------|-----|--------|
| 希望 | 希望する | 108 | (64.3) |
| | できたら希望する | 31 | (18.5) |
| | 希望しない | 18 | (10.7) |
| | 考えていない | 10 | (6.0) |
| | 無記入 | 1 | (0.6) |

表5. 解決したい課題の記載の有無 n=168

| 項目 | カテゴリー | 人 | (%) |
|-------|-------|-----|--------|
| 課題の記載 | あり | 107 | (63.7) |
| | なし | 61 | (36.3) |

題」に「あり」と回答した 168 名中 107 名 (63.7%) が、各自の「解決したい課題」の内容を記載していた (表 5)。その内容を分析した結果、計 163 個の有意な内容が抽出され、その中で「解決したい課題」と判断できた 157 個を内容の類似性に基づきカテゴリー化した。その結果、75 小カテゴリー、14 中カテゴリー、5 つの大カテゴリー (①臨床の看護学領域ごとの課題、②看護の専門性に関すること、③看護管理に関すること、④看護の教育に関すること、⑤その他) に分類された (表 6)。以下、大カテゴリー (【】) ごとの内容を中カテゴリー (〈〉) と小カテゴリー (《》) を用いて示す。

①【臨床の看護学領域ごとの課題】

この大カテゴリーに該当した自由記載数は 92 個であり、全記載数の 58.6% を占めた。それは、記載の多い順に〈精神看護学〉〈がん看護学〉〈母子看護学〉〈地域看護学〉〈家族看護学〉〈感染看護学〉〈終末期看護学〉〈在宅看護学〉〈災害看護学〉〈急性期看護学〉〈老年看護学〉という 11 の中カテゴリーから構成された。さらに〈精神看護学〉は《精神的ケア》《精神・心理学》《患者の心理》など 8 つから、〈がん看護学〉は《パリアティブケア》《がん看護全般》など 4 つから、〈母子看護学〉は《育児支援》《周産期看護》など 9 つから、〈地域看護学〉は、《地域連携》《福祉》など 5 つから、〈家族看護学〉は《家族へのケア》《家族看護全般》など 3 つから、〈感染看護学〉は《感染対策》《感染に関する継続研究》の 2 つ

表6. 解決課題の内容

| 大カテゴリー | 中カテゴリー | 小カテゴリー | | |
|------------------------|-----------------------|--------------------|----------|-----|
| 臨床の看護学領域 ごとの課題 (92) | 精神看護学 (22) | 精神的ケア | (8) | |
| | | 精神・心理学 | (6) | |
| | | 患者の心理 | (2) | |
| | | せん妄 | (2) | |
| | | アディクション | (1) | |
| | | 虐待 | (1) | |
| | | ドメスティック・バイオレンス | (1) | |
| | | ジェンダー | (1) | |
| | | がん看護学 (15) | パリアティブケア | (7) |
| | | | がん看護全般 | (4) |
| | がん患者の心理 | | (2) | |
| | がん患者の家族の心理 | | (2) | |
| | 育児支援 | | (2) | |
| | 母子看護学 (10) | 助産分野の国際看護 | (1) | |
| | | 助産師の海外派遣 | (1) | |
| | | 母性看護全般 | (1) | |
| | | 周産期看護 | (1) | |
| | | 小児看護全般 | (1) | |
| | | 母親の心理 | (1) | |
| | | 子どもへのケア | (1) | |
| | 地域看護学 (9) | 性教育 | (1) | |
| | | 地域連携 | (3) | |
| | | 福祉 | (2) | |
| | | 精神的ケア | (1) | |
| | | 学校保健 | (2) | |
| | | 保健指導 | (1) | |
| | | 家族看護学 (8) | 家族へのケア | (5) |
| | | | 家族看護全般 | (2) |
| | | 感染看護学 (8) | 家族の心理 | (1) |
| | | | 感染対策 | (7) |
| | 終末期看護学 (7) | 感染に関する継続研究 | (1) | |
| | | 終末期看護全般 | (4) | |
| 終末期患者の心理 | | (1) | | |
| 在宅看護学 (5) | 終末期患者の家族の心理 | (1) | | |
| | グリーフケア | (1) | | |
| | 在宅看護全般 | (4) | | |
| 災害看護学 (4) | 在宅看護に対する家族の意欲 | (1) | | |
| | 災害時のケア | (2) | | |
| 急性期看護学 (3) | 災害看護全般 | (1) | | |
| | トリアージ | (1) | | |
| | 小児一次救命処置 | (1) | | |
| 看護の専門性に関する こと (21) | 老年看護学 (1) | 急性期のクリティカルパス | (1) | |
| | | 老年看護全般 | (1) | |
| | 看護の専門性に 関すること (21) | 専門的な知識 | (4) | |
| | | 看護ケア | (4) | |
| | | 新しい知識、援助 | (3) | |
| | | 理論・概念 | (3) | |
| | | 研究方法 | (2) | |
| | | 患者指導 | (2) | |
| | | 看護の専門性 | (1) | |
| | | プログラム開発 | (1) | |
| 専門看護師 | | (1) | | |
| 看護管理に関する こと (15) | | メンタルヘルスマネージメント (8) | 精神衛生 | (3) |
| | ストレスコントロール | | (3) | |
| | 職場環境のあり方 | | (1) | |
| | 管理 (5) | 仕事に臨む気持ち | (1) | |
| | | スタッフ管理 | (2) | |
| | 業務改善 (2) | 医療経済 | (1) | |
| | | 安全管理 | (1) | |
| 看護の教育に関する こと (13) | その他 (16) | アメニティー | (1) | |
| | | 業務改善 | (1) | |
| | | クリティカルパス | (1) | |
| | | 新人指導 | (3) | |
| | | 学生指導 | (2) | |
| | | 院内教育 | (2) | |
| | | 看護師養成課程 | (3) | |
| 教育学 | (2) | | | |
| 指導方法 | (1) | | | |
| その他 (16) | 疾病 | (9) | | |
| | 健康状態 | (3) | | |
| | 移植 | (1) | | |
| | 遺伝子 | (1) | | |
| | 予防の観点 | (1) | | |
| 医療人類学 | (1) | | | |

() 内数値は自由記載数

から、〈終末期看護学〉は《終末期看護全般》《グリーフケア》など4つから、〈在宅看護学〉は《在宅看護全般》《在宅看護に対する家族の意欲》の2つから、〈災害看護学〉は《災害時のケア》《トリアージ》など3つから、〈急性期看護学〉は《小児一次救命処置》《急性期のクリティカルパス》など3つから、〈老年看護学〉は《老年看護全般》という1つの合計44の小カテゴリーから構成された。

②【看護の専門性に関すること】

この大カテゴリーに該当した自由記載数は21個で、全記載数の13.4%を占めた。中カテゴリーはなく、《専門的な知識》《理論・概念》《研究方法》など9つの小カテゴリーから構成された。

③【看護管理に関すること】

この大カテゴリーに該当した自由記載数は15個で、全記載数の9.6%を占めた。それは記載数が多い順に〈メンタルヘルスマネジメント〉〈管理〉〈業務改善〉という3つの中カテゴリーから構成された。さらに〈メンタルマネージメント〉は《精神衛生》《ストレスコントロール》などの4つから、〈管理〉は《スタッフ管理》《安全管理》などの4つから、〈業務改善〉は《業務改善》《クリティカルパス》の2つの合計10の小カテゴリーから構成された。

④【看護の教育に関すること】

この大カテゴリーの自由記載数は13個で、全記載数の8.3%を占めた。中カテゴリーはなく、《新人指導》《学生指導》《院内教育》など6つの小カテゴリーから構成された。

⑤【その他】

この大カテゴリーの自由記載数は16個であり、《疾病》《健康状態》《移植》《遺伝子》など6つの小カテゴリーから構成された。

V. 考察

1. 解決したい課題と大学院（CNS）への関心

解決したい課題のある看護師の属性（表1）をみると、経験年数が1年未満の者は少数であり、経験年数が上がれば上がるほど対象者数（課題をもつ者の数）は多くなっていた。また、解決したい課題のある者の中には、大学院設置の意義（表2）が「ない」とする者は認められず、入学ニーズ（表3）について「入学はしない」と回答した者は2割にすぎなかった。入学ニーズ（表3）の「すぐに入学したい」「いずれ入学したい」者は合わせて約5割であることから、生涯教育に対する前向きな姿勢が窺える。さらに、CNS取得希望（表4）は、「希望する」と「できたら希望する」と回答した者は8割以上で、CNS取得に対する関心の高さが示唆された。

以上より、経験を経るとともに課題を見出し、それとともに生涯教育や高度専門教育の重要性を認識し、自己の研鑽、特に臨床で活かされる専門性の向上を自ら志向する、といった臨床看護師像がイメージされる。

2. 課題内容とその背景、課題が意味するもの

業務遂行の中で抱えている解決したい課題（表6）の、各大カテゴリーの自由記載数をみると、【看護管理に関すること】は15個、【看護の教育に関すること】は13個で、両者を併せて全記載数の約2割弱を占めた。これは、臨床看護師が業務遂行の中で抱えている課題として、直接患者や家族を対象とする臨床看護に加え、多側面的な課題が生じている可能性を示唆している。実際、【看護管理に関すること】の小カテゴリーは、《精神衛生》《ストレスコントロール》《スタッフ管理》《安全管理》《医療経済》《業務改善》といった、管理の視点から捉えた諸課題が抽出された（表6）。特に、基本的なマネジメントのみならず、看護師のメンタルヘルスも課題として捉えられていたことから、看護師のストレスが高いという認識が、組織内で浸透していることが窺える。一方、【看護の教育に関すること】の小カテゴリーの内容からは、《新人指導》《学生指導》など看護学生や後輩看護師への教育に関する課題が抽出された（表6）。

次に、大カテゴリー【臨床の看護学領域ごとの課題】の記載数が約6割を占めていた（表6）ことから、大半の看護師が基本的には、日常の看護ケアそのものに対して課題を抱えていることが示唆された。

最後に大カテゴリー【看護の専門性に関すること】の自由記載数は全記載の1割強を占めたに過ぎなかったが（表6）、その内容は《研究方法》《理論・概念》《専門的な知識》《新しい知識、援助》等、網羅的で充実していた。対象看護師は、看護ケアの知識や技術の向上のために看護研究が必要であると認識し、その方法論を課題として掲げていることから、看護研究に対する志向性と意欲を反映していると考えられる。黒田（1997）は、看護研究の対象として①看護教育に関する研究、②看護管理に関する研究、③ナースの特徴に関する研究、④看護の役割に関する研究の4つがあると述べている。看護師が業務遂行の中で抱えている解決したい課題の大カテゴリー【臨床の看護学領域ごとの課題】【看護の専門性に関すること】【看護管理に関すること】【看護の教育に関すること】は、これらの4つと一致する傾向が窺われた。ここで注目できることは、本研究の対象者が看護の研究者や教育者ではない臨床看護師であること、かつ、業務遂行上の課題を尋ね、その回答として、【看護管理に関すること】や【看護の教育に関すること】が抽出され、実践の場にいる臨床看護師の課題意識と看護研究のテーマは、一致する傾向が窺われたことである。まさに、看護学が実践科学であることを示唆している。

VI. おわりに

大学病院の就業看護師を対象に、大学院への入学ニーズと研究ニーズを調査した。今回、その結果の一部、「業務遂行の中で抱えている問題意識と研究等で解決したい課題」（自由記載）を分析したところ、解決したい課題内容は、【臨床の看護学領域ごとの課題】【看護の専門性に関すること】【看護管理に関すること】【看護の教育に関すること】【その他】の5つのカテゴリーに分類された。患者や家族への直接的なケア（臨床看護）に関する課題以外に、看護管理や看護教育、看護の専門性に関する課題が抽出されたことから、臨床看護師は看護組織そのものに関する多様な課題を抱えていること、一方で、看護の質向上のために看護研究は必須と認識し、その方法の習得を課題として捉えていることが示唆された。また、以上掲げられた課題内容は、看護研究のテーマとも一致する傾向が窺われ、現場の課題意識が、「教育や研究に関わる者の課題意識」と共通していることが示唆された。このような臨床と教育・研究分野の課題認識の共通性は、これまでの両者の連携を支えてきた基盤であり、今後もその基盤のもと両者の連携を発展させていくことが望まれる。

謝 辞

本調査の趣旨を理解し、ご協力いただきました大学関連病院看護部長、5施設の看護管理者およびスタッフの皆様にご感謝申し上げます。

なお、本研究の一部は第46回日本医療・病院管理学会学術総会にて発表した。

文 献

井上幸子, 平山朝子, 金子道子 (1991): 看護学大系 第10巻 看護における研究, 第2版, 日本看護協会出版会, 東京, 3-4.

黒田裕子 (1997): 黒田裕子の看護研究 step by step, 第2版, 学研, 東京, 4-5.

松下年子, 岡部恵子, 天野雅美他 (2008): 就業看護師の大学院修士課程入学ニーズ, 日本保健科学学会誌, 11(suppl), 13.